

読書のすゝめ

その16 H 29 9 / 8

重陽の節句・・・9月9日

重陽（ちようよう）は、五節句の一つで、旧暦では菊が咲く季節であることから菊の節句とも呼ばれます。陰陽思想では奇数は陽の数であり、陽数の極である9が重なる日であることから「重陽」と呼ばれます。奇数の重なる月日は陽の気が強すぎるため不吉とされ、それを払う行事として節句が行なわれていたようですが、9は一桁の数のうち最大の「陽」であり、特に負担の大きい節句と考えられていました。のちに、陽の重なりを吉祥とする考えに転じ、祝い事となったものです。

菊は古来より薬草としても用いられ、延寿の力があるとされてきました。菊のおかげで少年のまま700年も生きたという「菊慈童」伝説もあります。平安時代以降、この日は邪気を払い長寿を願って、菊の花を飾ったり、菊の花びらを浮かべた酒を酌み交わして祝ったりしました。また前夜、菊に綿をおいて、露を染ませ、身体をぬぐう着せ綿などの習慣がありました。



『かがみの孤城』辻村深月（ポプラ社）
学校での居場所をなくし、閉じこもっていたところの目の前で、ある日突然部屋の鏡が光り始めた。輝く鏡をくぐり抜けた先にあったのは、城のような不思議な建物。そこにはちょうどどこころと似た境遇の7人が集められていた――なぜこの7人が、なぜこの場所に。生きづらさを感じているすべての人に贈る物語。
いじめや不登校の問題・・・ありがちな題材なので、今回もそれか、と思いつながら読んで一冊でしたが、緻密な伏線と予想を裏切る展開に引き込まれ、ラストでは思わず・・・すべての人に読んでもらいたい本です。



『ナミヤ雑貨店の奇蹟』東野圭吾（角川書店）
夢をとるか、愛をとるか。現実をとるか、理想をとるか。人情をとるか、道理をとるか。家族をとるか、将来をとるか。野望をとるか、幸せをとるか。あらゆる悩みの相談に乗る、不思議な雑貨店。しかしその正体は・・・
「過去から手紙が届く」というファンタジーなのに、物語は「なぜ届くのか」を説き明かしていくミステリー。そして、数々の伏線がみごとに一つに収束するラストシーン。2012年に刊行され、この秋映画化されて話題になっている原作をぜひ読んでみてください！



- ◎ 何を読んだらいいか迷う人へ
- ※ 『学校図書館の司書が選ぶ 小中高生におすすめの本300』
- ※ 『十歳までに読んだ本』

※ 文楽鑑賞教室の案内

国語科主催で伝統芸能鑑賞に出かけます。今年度は『文楽』！
12月9日（土）に東京国立劇場での文楽公演『日高川入相花王（ひだかがわいりあいざくら）』と初心者に向けた解説付『新口村の段』を鑑賞します。各クラスに募集要項を配布しますが、くわしく知りたい人は図書館・井坂まで問い合わせてください。